

---

# 桃源郷の彼方

茶太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桃源郷の彼方

### 【Zコード】

N4426J

### 【作者名】

茶太

### 【あらすじ】

「遠堂愁二」は暗い毎日から脱出するべく親戚が住んでいる瀬戸内海上に浮かぶ小さな島、長沖島の学校に晴れて通うことになった。しかしその島には代々たる不吉な習わしが存在していて…。

## 第一章

「オオオオオオ…。

「オオオオオ…。

梵鐘が鳴る音が聞こえてくる。

この島で こんな真夜中に鳴り響いているなんて なんて不吉な…。

鳴らしてこる奴は誰なんだ…。

……。

9回で止まつた…。

「おひそかよー、愁君。」

学校帰りなのか、学生カバンを肩にかけて俺の名前を呼んでいるのは原村和はらむらのとか。

“和”と書いて“のどか”と呼ぶ。

ここは瀬戸内海に浮かぶ小さな島 長沖島だ。ここに俺が通っている学校がある。

そしてこの長沖島には古くから言い伝えられている習わしがある。その習わしとは、原村神社の梵鐘を9回 15秒間隔で鳴らせば魂

が現世に蘇り、自身はただの肉片と化してしまつ。という恐ろしい話しだ。

戦後まもなくその習わしは事実上崩壊し、当時の住民の人々はもういなが、原村源蔵という老人がその事実を知っているみたいだ。しかし源蔵さんは誰一人とも公言した光景を見たことがないし、本人さえも否定して疑わない。

そもそもその習わしは現代でいう都市伝説のようなもので、魂が肉体から抜かれるような現象を誰か確認したわけではない。その昔、次々と村人が原因不明の病に倒れそのような現象が起こつたような話を聞いたことがあるが、それは結核というれつきとした病名があり、すでに科学的に証明されている。

原村源蔵さんは和の祖父に当たる人だ。島の人口も減少し島民は高齢化が進み寂びれてしまつた足長神社の巫女で 小中合同の学校に通つている生徒だ。

全校生徒の数は小中合わせても十数人余りで授業もほとんど体育ばかりだ。

原村和は俺がこの島に引っ越して初めての友達だ。詳しい風習はこの子から教えられた。

学校の先生は昼夜問わず居間でゆっくりお茶を飲んでいるような老夫婦が交代で務めている。

こんな青空学校の代名詞たる場所にわざわざ転校する理由がない。とも言えるだろうが、のどかな自然豊かな島で悠悠自適な生活を送ることは願つてもないことだ。

ちなみに俺は上条家のお手伝いとしてホームステイさせてもらつてゐる。

「誰が石段の頂上に着けるか競争だよー。」

学校が終わり、和と そして小学生の上条当麻君かみじょうとうまきと原村神社への石段造りの階段を走っている。

「体力がないですよ兄さん これくらい朝飯前じゃないと運動会で一等賞を取れません。」

遠堂というは俺の苗字だ。遠藤ではなく遠堂。そして当麻とは同じ屋根の下で暮らしている従兄だ。

「つるせー 都会者にはきついんだよ。」

ぜえぜえ息切れをしながら石段をせっせと登る。先の2人にはかなりの距離が出てしまった。

文句たらたらだがこいつやって友達と外で遊ぶことは新鮮で気持ちがいい。

俺は長沖島にやつてくる前は東京に住んでいた。

気が弱く、その上運動音痴のため それが高じてクラスメイトに集団で苛められ後々不登校になってしまった黒歴史がある。

「はーい 私が一番だね。うーん……じゃあ帰りに当麻君のラングセルを背負つて帰るよ!」

「死ぬ…」

息切れ中の俺になんて過酷な命令だ。

原村神社に到着した俺は神主さんにお茶を出してもらい それを飲んだとはすぐに掃除だ。

今日は原西神社に掃除の手伝いに来ている。これは任意ではなく学校の中でのルールだ。

「さあ 今日は早く帰って今度は僕とランニングですよ。」

黒ぶちメガネをくいつとあげて階段の下へ口笛を吹きながら竹ぼうきを持って降りていく。

すぐに和が俺の肩に手を置いてスキンシップをとつてきただ。

「さ、私たちは鐘の方をやらないとね。いくよ」

和は誰それ構わず話しかけるときは体をべたべた触る癖がある。

掃除をさぼり気味に適当に板を拭いている

和と一緒に梵鐘を雑巾で雑巾で拭いていると昨日の鐘の音を思い出した。

なあ和、昨日この鐘を夜に鳴らしていたか？ なんて聞くと  
んー？ 鳴らしていないよ。 なんでー？ と言ひ返されるに決まつ  
ている。

聞こえたから なんて言えない。 もしかして夢の中で鳴っていたの  
かもしねない。

そもそもそれが夢の中の話しならいいでぶっちゃけたら恥ずかしい  
ことこの上ない。

「やあやあ 元気に掃除しているか諸君。」

いきなり声をかけてきたこの少女は宮永咲。みやながさき

この真冬日に薄着の姿で髪型をショートカットしている。  
俺と同じように転校してきたそは日が絶たない島民だ。  
転校してきた理由は俺の場合親戚という間柄で住ませてもらつてい  
る反面、咲の場合は父親がこの島にある土木工業の社長なので仕事  
の関係上止む無く引っ越しをしたというわけだ。

土木工業がこの島に建設され発展途上中なので、引っ越しの家族連れの方々を結構見かけるようになつた。

「あ、咲ちゃん。うん、しつかりやらないと正月に参拝するお客さ  
んに失礼だよ。」

「なんだ それはそつと愁君の方はあまり誠意を出してないみたいだねえ。次の週は私が当番だからきつちりするんだよ。」「  
きつちりするんだよ という言葉にむかづぱらが起つた俺は舌を出

してからかう。

「やっぱり懸命にするのやめた。適当にする。」

「なあにー、せつかく応援に来たのにそれはないよ愁君ー。」

「こつはすぐに本氣にする奴だ からかいつがある。」

「じゃあ… どれだけきれいに磨けたか勝負だ。神主さんで褒められた方がジユースをあごりつてこにしよう。」

「臨むとこだよー！」

そんなやつとりをしてこると階段の方から当麻がこちらに駆け足で向かってくる。とても青白い顔で だ。  
体力に自信がある奴なのになつきの俺みたいに息切れをしてこる。なにか変だ。

「どうした当麻、変なもんでも食ったか。」

「はい さっきのお茶が当たつたみたいです…。僕はこのあたりで失敬させていただきますよ。」

その姿はとても苦しそうだった。何か嫌なものでも見たかのような表情だ。

咲が口を開く。

「あらり リンドセル持つて行ってしまったねえー、じゃあ私をおぶつて階段を下りて。」

俺は即座にこう返した。

「却下」

## 第一章（後書き）

はじめまして。茶太です。  
文章力も独創性もまったくない素人ですがこれから自分の作品を作り上げていきたいと思います。良ろしければどうぞ応援してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4426j/>

---

桃源郷の彼方

2010年10月21日22時37分発行